

ブラキムラとめぐる！ 仙台城下町ボヤージュ 【2026年6月2日放送分 表柴田町／元茶畑】

毎月第1火曜日に放送しています。歴史家で街歩きの達人・ブラキムラこと木村浩二さんと、旧城下町に88本ある石柱＝辻標から歴史の痕跡を探る旅です。街歩きのお供には、仙台市役所1階の市政情報センターなどで販売中の冊子、その名もズバリ「辻標」が便利です。88本ある辻標の場所や周辺の歴史が、写真とともに分かりやすく解説されています。

- 今回は地下鉄東西線の連坊駅近く、仙台一高の周りをブラブラする歴史散歩です。
仙台一高の南側の通りが、今回ご紹介する表柴田町。表があれば裏もあるという事で、1本北側の通りはグラウンドに半分飲み込まれてしまっていますが、裏柴田町と呼ばれています。
どちらも、県南の柴田郡から移り住んだ足軽達の町。実は、表・裏柴田町に住んだ足軽達には、伊達政宗公から隠密という特殊任務が与えられていたともいわれます。黒脛巾(くろはばき)組と呼ばれた彼らは、その名のとおり黒い革の脛(すね)当てをユニフォームにしていたようです。また足軽の町で出身地の名前が冠された例は、仙台城下で他にも見られます(成田町など)。



- 仙台一高南側の表柴田町には、重要な史跡があります。江戸後期の思想家、林子平の蟄居の地です。林子平は「海国兵談」などを著して沿岸部の国防の重要性を説いたため、鎖国下の幕府から危険視され、蟄居謹慎を命じられました。林子平が謹慎した仙台藩士の兄の居宅が、仙台一高の南側にあったのです。案内板とともに石碑が置かれています。

- コーナー68本目となる辻標は、仙台一高の南西角。「表柴田町／元茶畑」と刻まれています。この辺は、仙台藩が領内各所で奨励した茶畑のひとつでした。記録によれば、お茶の木を植えはじめたのが寛文11年(1671)。南東向きの斜面がお茶の栽培に適していたのでしょう。

しかし、各年代の絵図からは茶畑の存在が確認できず、数十年で潰されてしまったと推測されます。その後は侍屋敷が建ち並ぶ街区になっており、「元」茶畑と地名に CONSEKI が残されたのでした。

〈文・佐々木淳吾〉

